

凡例

本史料は、日立市大和田町大内家所蔵で、日立市郷土博物館に寄託されている（HT13・001・217）。

水戸藩領常陸国久慈郡田中々村の郷士大内達直の記録で、縦帳形式で、表紙に「海防為御手当川尻定勤諸用留」とある。文政八年から同十二年までの事項が記載される。

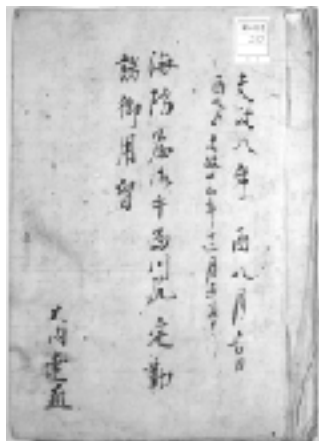
史料の収録にあたり、原本の形式や表記法を残すようにつとめたが、編さんの必要上、原本の意味を損じないかぎり、次のように取り扱った。

- (1) 編者において適宜読点を付した。
- (2) 漢字は原則として常用漢字を使用した。一部原本の正字のままとしたものもある。
- (3) 仮名については、片仮名はそのままとし、変体仮名はすべて平仮名に改めた。ただし、助詞の「者」「而」「茂」「江」「与」や「而已」等の変体仮名は、漢字のまま小さくして示した。
- (4) 合字はひらかなに改めた。ただし、*カ*（より）はそのままとした。
- (5) 意味の通じるあて字は原本のままとした。
- (6) 明らかな誤字は修正した。
- (7) () は、編者が補足、訂正、註記したもの。□は虫損、破損などにより判読不能なところ。字数を推定できないときは「*レ*」とした。「*ミ*」は見せ消し。
- (8) 敬礼のための平出・台頭は二字空欠とし、闕字は一字空欠とした。

目次

文政8年	2
文政9年	5
文政10年	9
文政11年	13
文政12年	20
袋綴内挿入史料	29

〈表紙及び史料冒頭部〉



文政八年 酉八月吉日
酉八方文政十二年十二月迄留ナリ

海防為御手当川尻定勤
諸御用留

大内達直*

(文政8年)

海防持場*手扣

一 滑川村 宮田境福地堂下方大田尻迄
総町拾四町三拾間

福地堂下ヨリ北川迄* 北川方具美島岸迄
八町三拾間 是者差船上陸 五町 是者岸壁ニ而
共ニ相成場所 差船難相成候

組島北磯ヨリ大田尻迄
老町 是者差船上陸相成場所

一 田尻村 惣町拾壹町拾間

大田尻方濱人家下迄 人家下方栄蔵小屋迄
四町貳拾間 是ハ岸壁ニ而差 老町拾間 是ハ差船
船上陸不相成 船上陸不相成 上陸相成候

栄蔵小屋方小木津境相田坪迄
五町四拾間 是ハ岸壁ニ而差 船上陸不相成候

一 田尻境方折笠境迄

小木津村 惣町廿壹町五拾間余

式町 是ハ差船上陸難相成

式町三拾間 右同断

三拾間 是ハ高磯ニ而 六町 是ハ沖合磯有
右同断 差船難相成候

六町 是ハ都而諸船出入
難相成候

式町拾間余 是ハ沖合磯有
差船難相成候

一 小木津村境方川尻境迄
折笠村 惣町四町三拾間 是ハ都而差船上陸相成候

一 折笠村境方川尻境迄
川尻村 惣町十七町四拾間余

一 六町四拾間 是ハ惣躰諸船出
入相成ル候場所 六町三拾間余
是ハ岩壁ニ而差船
相成候

一 四町三拾間余 是ハ大岩壁
ニ而右同断

一 川尻境方伊師町境迄
伊師濱村 惣町廿壹町四拾間余

一 五町 是ハ大岩壁ニ而差 四拾間余 是ハ漁業小船少
船上陸難相成候 手浦 磯合方出入のミ

一 老町三拾間 是ハ岩壁ニ而 八町 是ハ沖合磯有之
差船難相成候 差船難相成候

一 六町三拾間 是者差船相成候

一 伊師濱界方石滝堺迄
伊師町村 惣町拾四町三拾間余

一 六町五拾間 是ハ差船上 三町三拾間 是ハ磯有之
陸相成候 差船難成候

一 四町拾間 是者差船
相成候

一 伊師町境ヨリ安良川境迄
石滝村 惣町貳町貳拾間余

是者差上陸相成候

*大内達直…通称勘衛門。久慈郡田中々村の郷士。

*海防持場…川尻浜詰めとなった郷士大内勘衛門と小宅権之丞が郷足軽とともに防備にあたる浜の区域。

*差船…さしぶね。御城米御用差船のことだが、廻船規模の船をさすか。あるいは着船の誤記か。

右海岸筋道程并ニ場所附之大図、但安良川境ニ小川有之候、右小川流レ方北者安良川村別高持分之事

一 郷足輕共へ稽古玉代、合薬被下候分左之通り

一 鏢五貫四百六拾六匁 内老貫三百六拾四匁

残四貫百貳匁渡り

前渡り分引 是ハ七月受取

一 合薬六貫目 内老貫五百目前渡り引 是ハ七月受取

残四貫五百目渡り

右之通り相渡シ候

玉代、合薬等渡りニ付御城下罷出請取申候

八月十四日

善蔵
受取人 彦八郎
栄次郎

鉄炮矢場、筵、手桶其外入用品等被下ニ可相成哉之程伺出候所、被下ニハ不相成趣ニ付、足輕共自分く調イ候

一 玉箱老荷、角板老枚、撞木共御矢倉方ヨリ佐野七郎

兵衛方へ御渡シニ相成候、右之品々佐野方ヨリ我等請

取ニ相成候

一 海防為御手当川尻村へ百目玉御筒式挺御指出ニ相成

候条、梶清次衛門江も通達之上、右付属者共御矢倉方

方相受取、当月中ニ相送り、右村定詰メ郷士江渡置候

様御取扱可被有之候、以上 此達シハ佐野へ之御達シ

ナリ

八月廿一日

△ 磯野濱村大筒掛リ跡詰無ク、八月廿日為御引ニ相成

候、同村詰メ御徒目附押下役等迄不残八月廿二(目録)為御引ニ相成候

△ 川尻村大筒掛リ跡詰無ク、八月廿九日為御引ニ相成、

同村詰御徒目附押下役等迄不残同月同日為御引ニ相

成、川尻村海防為御手当御渡シニ相成、百目御鉄炮

一 唐銅御筒 式挺 木輕篋 式本 一同鉛玉 八拾箱入

一 合薬 五貫目 一口薬 三百日 一筒薬入張ザル 式ツ

一口薬入竹筒 式ツ 一竹火繩 五篇 一同雨火繩 五篇

一 銃貫 式挺 一木槌 式挺 一棒 式本 但杉

一 青細引 式本 一 渋紙 四枚

右之通り海防御用川尻村為御手当請取申候、御用相済

次第返納可申候、以上

文化八酉八月

(貼紙*)

「海防御手当川尻村詰大筒方并御徒目付等来ル廿九日

為御引相成候条其旨御心得、猶無油断致警衛候様郷

士等へ御申付可被有候、以上

八月廿六日

筋方
佐野七郎兵衛

△ 川尻村海防御用御武器類預之品々

一 旅箱 志ツ 但此内品訳ケ

騎馬具足 式領 但惣黒塗 甲押半月 是者銘々渋紙包

一 さる額 胴繰ベ布附 小手毘沙門 小袴 麻

一脚当角摺附 上帯白麻 請筒竹 佩錆色塗

指物縮式人前 但紺地白輪抜名前并郷之字附

*合薬…ごうやく。あわせぐすり。火薬のこと
*撞木…(シユモク・トウボク) 鐘、鉦などを打ち鳴らす丁字形の棒。

*矢倉方…矢倉奉行。

*佐野七郎兵衛…川尻浜の海防指引(さしひき)。指引とは今風に言えば指揮官だろう

*梶清次衛門…石神組郡奉行。兼河原子浜海防指引。この時期、奉行所は大沼村(日立市東大沼町一丁目18)に置かれた。

*磯之濱村…鹿島郡磯浜村。現大洗町。

*口薬…くちぐすり。火繩銃の火皿に置く発火用の火薬。

*筒薬…とうやく。鉄砲の火薬。

*銃貫…銃は小さなかんざし、あるいは小さな釘のこと。ここでは釘抜きのようなものをさすか。

*この貼紙から、大内勘衛門らは川尻浜での海防の任務を文政八年八月二十九日から引継ぐように佐野七郎兵衛から同月二十六日に命じられたことが知られる。この貼紙の前の本文に関連記述がある。

一 拾行 胴之内エ入ル 是者洪紙式枚ニ而老領宛銘々包

一 指物竿式本 横手共ニ 是者洪紙老枚ニ而包、青細引式本
ニ而からけ

一 旅箱拾 此内品訳ケ 朱紋同心 具足五拾領 但箱老ツエ
五領宛入

御矢倉方御道具手入之節同心具足之内式領ト胴せん無之趣
申聞有之事

一 小手 金輪貫 革笠 五拾 胴繰ベ布附

胴繰ベ布ハ千草木綿四ツさキニ而長五尺七寸しんなし、巾
四分ニくけ上 内胴繰ベ布老本不足

一 上帯紺木綿五拾筋 袖印五拾枚 丸之内胤之字付、是者
箱老ツ切細引ニ而

三兩五分玉

一 鉄炮五拾挺 箱五棹 棒共 但老棹鉄炮拾挺宛入箱之上
銘々洪紙色青細引ニ而

御鉄炮入箱之上銘々洪紙包ト有之処、全ク包候ニハ無之候
得共、末々有之四方洪紙七枚之外ニ五枚有之、一同老トカ
ラゲニ致置候分、右箱五棹包候分ト相見エ候事

一 同老ツ 此内品訳ケ
雨革五拾枚

早合* 胴乱五拾 但黒塗金輪貫

附紐共、是ハ青細引ニ而

一 箱老ツ 此内 竹雨火繩百五拾筋 竹火繩老房ハ会瀬改
之節方不足ト相見ヘ、
品訳ケ 箱之上内懸アリ、内竹
火繩老房不足

一 口薬壺五拾 但黒塗金輪貫附是者青細引ニ而

一 洪紙包老ツ 此内品訳ケ三匁五分 鉛玉千、但箱老ツニ人

一 合薬老貫目 口薬 百目 但箱老ツニ人、是ハ小袖引ニ而
但洪紙老枚ニ而卷

一 荷桶三荷 此内品訳ケ

陳錫* 六ツ 大小蓋共 面桶 七拾式人前

御野イ

一 合薬老貫目 口薬百目三匁五分 鉛玉千 小洪紙老枚

一 四方洪紙老枚

此五行御矢倉方封印之俣ノ分 天保二卯四月六日
開封ニ成候

一 四方洪紙七枚 雨覆分 此洪紙七枚之外御鉄炮入箱五棹包
候分ト相見エ五枚アリ、都合拾式
枚一トからげニ成ル

一 袖印 村役人分 五枚 但村役人分 木綿白地江村之字付

一 畳具足* 式領 但胴麻繰ベ布附

此畳具足式領ハ坂上御郡方へ相渡シ申候

一 小手脚当上帯 但シ紺木綿

一 袖印式枚 但木綿白地エ墨老ツ引
龍下ニ水之字□リニ代之字附

一 五行 是者洪紙式枚ニ而老領宛包

右川尻村海防御手当御用御武器類此度我等江御預ケニ
相成候ニ付、前書之御品々相改無相違預リ指置申候、
以上

預り人 小宅権之丞*

大内勘衛門

文政八年西九月 外ニ丸水御高張老ツ掛共ニ

(貼紙)

「天保二卯ノ四月六日御矢倉方御改開封之所、内包に洪紙
老枚并小細引老本不足之由御矢倉方申候事

一 御矢倉方之留ニハ、御貯合薬老貫目、口薬百目、

鉛玉千、尤三匁五分也、小洪紙ハ合薬入箱ヲ包候分、

四方洪紙ハ玉入候箱、合薬入候箱等迄一ト包ニ致、

小細引ニ而結イ、封印ノ俣之由ニ而候、尤右御矢倉

方封印之俣ニ而受取置候所、前文之月日ニ開封ニ相

成候事

*早合…はやごう。火薬をこめた紙製の小さな筒。小銃にこめて弾丸を発射させるのに用いた。装填が簡便であったことからの称。現在の薬莖にあたる。はやご。

*陳錫…不詳。勘衛門はしばしば陣を陳と誤記する。

*畳具足…折り畳める甲冑。

*坂上御郡方…文政八年四月、石神郡奉行所の石神陣屋は、那珂郡石神外宿村(東海村)から多賀郡金沢村(日立市)へ移転した。

それに伴い坂上陣屋と改称された(「御用留類聚」中山家中高橋家文書244 茨城県立歴史館蔵)。

*小宅権之丞…那珂郡菅谷村の郷土。

佐野七郎兵衛へ御達ノ写

御先手同心列

川尻村

廿分一改役 忠兵衛

右之者川尻村郷足輕世話役兼職申付、加恩金式分爲取、防禦之儀御自分得指図ヲ、小頭同様之心得ニ而相勳候様相達候条其旨相心得、定詰郷士共江茂申合、合図役ヲも可被申付候事

梶清次衛門 佐野七郎兵衛 小泉伝三郎*

海防足輕世話役兼職廿分一改役共鉄炮ヲ茂為打、萬一之節者右足輕共稽古筒相用、玉薬并付属器渡繼稽古合薬玉代之義茂一統之通り相渡候条取扱候様御達之事

右九月廿九日御達

佐野七郎兵衛へ御達之写

川尻村大筒御用幕、高張等申出之通り向々エ相達候条宜取扱候様御達之事、但蠟燭之義者先ツ三拾挺御請取、萬一之節者御自分出馬有之事ニ付、其節又々相請取候様御達之事

一 来正月中坂上御預百目筒町打岡部新次衛門試候様、黒沢彦兵衛、大内勘衛衛門自分筒百目試候様^{シヤ}森山平馬臺^{*}ニ而此度限り相濟候由梶清次衛門方申来り、尤日限等者追而申遣候間、其節勘衛門指出候様文通有之候事 一、来正月登 城之義非番之者老人罷出候様梶へ文通致候事 一、郷足輕袖印出来候処、年内間ニ合不申候、来春御渡し可申候事

酉極月廿二日

佐野七郎兵衛

昨朔日湊村陸近ク異国船壹艘南方北江走候者近有之候ニ付、此上見当次第早速可訴出旨濱々へも相達候所、右之趣御心得可被有之候、以上

(文政9年)

四月二日

梶清次衛門

尚々此上異船相見へ御自分出張之節者御貸夫老人は迄之通り相濟候ニ付、川尻村方可指出旨右村江為相達置候条其旨御心得可有之候、已上

一 小宅権之丞御普請方役所エ罷越、御長家仕上り之書付貫度由申候ニ付、左之通り申来候

以書付啓上仕候、御役家目録御手扣ニ被成候ニ付、写御廻シ申候様先達而役所へ御出之砌御咄□御座候間、則為念御廻シ申候間御落手可被下候、右段申上度如斯御座候、已上

四月十五日

湯沢善次平

島田甚兵衛

川尻御役家之目録之写

一 御役家老棟 妻四間長拾貳間半、二タ住居、惣土臺、家上山萱葺、下板敷、老分住居ニ付貳間四方之御用座敷、老尺五寸ニ老間之床付キ、次ニ同断押入、前ニ貳間中三尺切目縁^{*}、兩戸ニシテ戸袋取付、同玄關九尺ニ貳間、前ニ幅貳尺ニ長貳間、掛臺^{*}同高老尺中老尺貳寸、箱段取付、兩脇高貳尺ニ三尺之のし立^{*}、同貳間四方之所茶之間前ニ老間ニ三尺之切目、椽^ホ三尺ニ老間、土間箱段付、三尺ニ四尺之爐老ヶ所、爐ぶち袴板

* 小泉伝三郎…磯浜の海防指引。

* 坂上…金沢村に置かれた坂上組郡奉行所。

* 町打…ちよううち。一町(約一〇九メートル)離れた的を鉄砲で打ち当てること。

* 森山平馬臺…日立市水木町に兵馬山という小字がある。北隣は森山町に接す。現在大みか

町七丁目2番、日立製作所日立研究所エネルギー研究棟が建つ平坦地をさすか。

* 湊村…那珂郡。現ひたちなか市。

* 長家…ながや。長屋。細長い形に建てた一軒の家屋。

* 切目縁…きりめえん。縁板を敷居と直角方向に張った縁。濡れ縁に用いる。

* 掛臺…かくだい。腰をかけるための台。

* 箱段…はこだん。側面に戸棚・引き出しなどを設けた階段。箱梯子。

* のし立…のしたて。家屋の外側の板張り。

共式尺二三尺之板、疊老間二九尺之所流場掛縁張、高

老尺五寸ニ老間之無双れん子取付、水流老ツ、臺共九

尺ニ老間之臺所、上り段付、同九尺ニ式間之次之間、

三尺ニ長式間掾、雨戸輪具戸袋取付、内納戸老間ニ式

間三尺ニ式間之竹縁取付、二夕住居共二前同断

一 琉球縁付疊拾四畳 一 杉半間戸式拾三本

一 木骨明り障子九本 一 鋪居鴨居三拾六挺

一 四挺 長式間 一 式挺 長九尺 一 式挺 長老丈

一 式拾四挺 長老間 一 四挺 長三尺 無目

一 御土藏老棟 九尺梁長式間、風窓戸式ケ所、裏白戸*

立込、家上棧瓦葺キ白土付、戸前裏白戸立込三ツ坪、

鉄物瀬戸車付、内椽板張打廻棚取付、外通り腰板張、

庇老ケ所瓦葺ニシテ、踏段杉荒分ニ而取付

一 井 老ケ所 但并桁杉荒分屋形柱栗丸太掘立ニシテ

井車輪具釣瓶井繩取付

一 鳥居門 老ケ所扉式枚竹木打交闊貫共取付

一 惣囲 朝せん柵六拾式間、杉丸太杭ニシテ取付

右川尻村我々共御役家御普請出来前書之通り受取置キ

申候、仍如件

文政九年戌三月 兩人姓名印

(貼紙*) 「海防為御手当川尻村定詰被 仰付候節御役家請取候砌、

御役家目録書指出置候処、天保七申正月定詰メ御免被

仰付、右川尻御役家御普請方相納候節ハ前方指出置、

書付へ末書ヲ認メ指出申候文言左之通り

右御役家改之上指上申候、依如件

天保七申五月

大内勘衛門印
小宅三左衛門印

山中五郎兵衛殿
萩助衛門殿

一 小木津村郷足輕久藏儀、欠落致候ニ付処々尋候得共
見エ不申ニ付、如可佐村役人願指出シ申候

乍恐以書付奉願上候事

一 当村久藏去西夏中々足輕御用被 仰付相勤罷在候
処、此度病身ニ相成、未不快御用相勤兼御指支ニ相成

候所、御仁恵之御了簡ヲ以テ御免被 仰付被下置候

ハ、村役人一同難有仕合ニ奉存候、偏ニ奉願上候、仍

而如件

小木津村

戊四月(交九月)

庄屋甚左衛門
惣組頭中

右之通り願書指出ニ付受取、佐野氏へ相廻シ候得ハ願
之通り御暇相濟、後職御召抱ニ相成候

一 右久藏御暇ニ付後職之者撰名前、川尻村ヨリ撰名前
清兵衛ト申者庄屋方撰書指出シ、折笠村ヨリ撰名前要

七、平重、紋助右三人庄屋方撰書指出シ候書付受取、

小宅我等兩人ニ而撰書認、右村方之撰書へ添、佐野

七郎兵衛方へ相廻ス、暫ク過而御郡方左之通り申来

り候

一 小木津村郷足輕久藏後職、折笠村要七江今十六日申
付候条其旨御心得可有之候、已上

五月十六日

梶清次衛門

小宅、大内宛

一 四月十九日磯野濱へ異船式艘見エ注進ヲ聞ク

* 風窓…かざまど。風を通すために作った窓
* 裏白戸…うらじろど。土蔵入り口の開き戸の
内側に設ける防火用の引き戸。

* 棧瓦…さんがわら。横断面が波状をした瓦。
一枚で、本瓦ぶきの平瓦・丸瓦の両方を兼ね
るもの。

* この貼紙から大内勘衛門と小宅が天保七年正
月に川尻定詰の任を解かれたこと、そしてそ
の役目から完全に解放されたのが、役家の引
渡をすませた五月のことだったことが知られ
る。

一 以書付啓上仕候、然ハ異船老艘陸方五里程遠沖ニ見
ヘ北ヨリ南ヘ走り申候、此段御届ケ申度如斯御座候、
已上

五月十六日

大内勘衛門

梶清次衛門様

一 佐野ヘ之許ヘハ權之丞認相届申候

右之異船昼頃ニ致而ハ川尻陸方壹里程ニ近寄、從夫
段々南ヘ走り、河原子^{*}ヘハ式拾町程ニ近寄候越申来
り、右沖ニ而少之間漂居り又々引歸シ、丑寅之方ヘ帆
陰も不見ヘ走り行

一 異船相見エ候節為防禦川尻村ヘ走付、獵師式拾五人
役処ヨリ一左右^{*}次第相詰候様兼而村々江相達置候所、

右ハ此上萬一火急之節ハ各様方方一左右次第走付候様
被成度旨被仰聞候所、則被仰聞候通り相濟候付其旨別
紙村々江相達、罷出候節^セハ各様方ヘ着届ケ致候筈ニ御
座候間、宜御取計可被成候、仍而獵師名前御扣相廻申
候間御落手可被成候、已上

五月十八日

照沼甚衛門
安島忠大夫

尚々異船相見候節いし濱村方訴出候節ハ各様ヘも申出
候様可致旨右村ヘ相達置申候、且駅場次付配符三枚相
廻申候間御落手可被成候、已上

一 河原子村江御指出置候御武器為御手入御矢倉方御指
出相成候義も有之候所、已後御手入之義ハ定詰郷士共
江為御任ニ相成候条無油断致手入候様御申付可被有之
候

一 郷足輕共ニ相渡候野羽織、平輪^和着用之者も有之歟ニ

相聞候所、右ハ異船相見出張之節ハ勿論其外御自分罷
出進退等試候節之外、平輪見廻り等ニハ不致着用候様
御申付可被有之候

一 郷士共引移候ニ付足輕共見張番相止、日々式人宛海
邊為見廻候旨被申出候趣も有之候所、乍勿論油断無之
様御申付可被有之候、已上

中村与一左衛門

梶清次衛門様

御渡之御武器手入之儀等別紙之通り御達有之候間、其
旨御心得可被有之候、已上

五月廿日 小宅、大内

梶清次衛門

覚

一 滑川村 獵師五左衛門 七兵衛

一 田尻村 獵師伝衛門 一折笠村 獵師惣衛門

同 五左衛門

一 小木津村 獵師吉兵衛 一 砂沢村 獵師伊

同 長兵衛

同 伝五郎

同 伝四郎

同 佐五衛門

同 平吉

同 三郎次

同 又十

一 友部村 獵師八郎衛門 一 山部村 獵師半

同 次郎兵衛

同 左兵衛

* 河原子…多賀郡河原子村。

* 一左右…いっそう。ある問題、事態などに對
処するための指示(日国)。

〆式拾六人

内老人ハ過ニ申付置候事

同 市左衛門
同 善次郎

(貼紙)

「海防為御手当川尻村へ百目玉御筒式挺御指出ニ相成候
条、梶清次衛門江も通達之上右付属者共御矢倉方方相
受取、当月中ニ相送り、右村定詰郷士江渡置候様御取
扱可被有之候、以上

八月廿一日

(貼紙)

「亥(文政十年)二月十四日

須藤弥十郎義異船御手当持居り候ニ付、時節方他行不
相成指支候趣相聞候ニ付、異国船遠沖ニ相見候風説等
も無之事静之節者、倅江代役之義得ト申含置致他行候
様御達可被有之候、已上

川尻、磯濱両村江御差出置之御武器、海邊ト申殊ニ新
土蔵ニ而湿気も可有之候条、無油断時々手入いたし候
様郷士共江御申付可被有之候、以上

一 右之通り此度御達シニ罷成候而ハ御手入之者者御差
シ出無之事ト存候、御苦勞ながら宜敷御取扱可被成
候、尤先達而御咄申候通り御鉄炮手入之紙油等御矢倉
奉行中江掛合候而相渡シ候ハ、受取御廻シ可申候

五月廿四日

佐野七郎兵衛

御達書別紙認遣候間兼而忠兵衛等へ茂御見セ置、御手
入之節者御呼出被成候而可然様存候、此段得御意候

△

一 五月廿二日儀、湊両村江ハ異船式艘陸方壹里計沖江
相見エ候、須藤鉄之介、大内五衛門等出張之由
川尻、磯野濱両村江御差出置之御武器海邊ト申、殊ニ
新土蔵ニ而湿気も可有之候条、無油断時々手入致候様
郷士共江御申付可被有之候
一 郷足輕共へ相渡シ野羽織平輪着用之者茂有之歟ニ相
聞候処、右者異船相見出張之節者勿論各罷越進退等試
候節之外、平輪見廻り等ニハ不致着用候様御申付可被
有之候

佐野七郎兵衛様

小泉伝三郎様

中村与一左衛門

右之通りニ御座候間、御同役并忠兵衛へも御見セ置可
然存候

去月廿四日御仕出、当朔日ニ相届キ致熟覽候、此節別
而暑氣相募候処愈々安康ニ被成御勤之候由珍重之御事
ニ存候、然者坂上御陣屋方之達シ書写シ御越致一覽候
処、右者我等方へも去月十四日御達ニ而、川尻御差出
シ御武器手入、足輕野羽織平輪見廻り等二者着用不致
候様と右両件御達シニ相成候処、異船相見出張之節并
ニ我等罷越進退試候節計ニ而、平輪見廻り等之節者着
用不相成候而者足輕共氣受^{*}も不宜、猶亦是迄海岸廻り
之節者御渡シ之笠為冠、野羽織為着来候処、今更引は
がし候様ニ而相達兼候ニ付、同役小泉伝三郎ト申合右
之訳御軍用懸へ申談、遂内談平輪海岸廻り之節茂野羽
織着用不苦候様ニ御軍用懸り方挨拶御座候、左候得バ

*氣受…きうけ。他人がその人やその人の行動
に対してもつ感情。

野羽織着用之義者是迄之心得ニ而外ニ違候事茂無之候、小泉我等申合候而御武器手入御達計ニ而野羽織着用之義者不相違候、此余之文言ハ略而不写

佐野七郎兵衛

六月二日

一 六月十八日、足輕具足虫干

手伝 (次左衛門 寧藏)

此日拾五領虫干濟 但シ五領入箱三ツナリ

一 同月十九日、足輕具箱獵師へ御貸シ出シ、具足箱等ニ而三ツ干、拾領ナリ、御幕入獵師へ御貸シ出ニ相成候、羽織等入箱式ツ、箱五ツ虫干濟

手伝 (七五郎 栄介)

一 同月廿日 霧深ク故虫干止メ

手伝 (要次郎 蔵)

一 同月廿一日 虫干

同月廿三日 虫干 手伝 (藤左衛門 彦八郎)

(文政10年)

一 折笠村組役弥次衛門倅文助常々不行跡ニ付御郡方方召捕ニ相成、入獄致候故、右弥次衛門恐入、指扣ヲ小頭忠兵衛方へ申出ニ付、取扱振不相分候故佐野へ申出候所、弥次衛門恐人指扣ニ不及段申来り候故、右之訳ケ忠兵衛方へ相達シ申候、以上

文政十丁亥ノ五月七日 海岸廻り

(作之丞 彦之丞)

一 八ツ半時頃彦之丞注進、異船相見へ候趣ニ付手前遠

目鏡ニ而見申候所、霧深ク異船和船之訳ケ更ニ不分故異国番へ申越御目鏡ニ而為見切候所ごサ帆之由申聞ケ故訴之儀指扣申候、乍去実者異船ニ紛レ無之候、尤川尻陸方老里位卜存候、遠沖ハ霧ニ而不見

△

五月八日、磯原野口友次郎方書面左之通り以書付致啓上候、然者今六ツ半時当所沖合大図式里程之場所異国船老艘相見申候、朝霧之中ニ而船形等之事ハ相分リ兼候得共帆形等ハ先來相見へ候船ニ相違無之候、船大サモ先來相見候船位之様子ニ相見へ申候、北江走り行キ候様ニハ相見へ候得共、風モ無之候間、唯今以漂イ居リ申候、此段御陣屋へも相届可申候所、先ツ御詰所へ為御知申候、思召ヲ以坂上御陣屋へハ其元様方早速御申立可被下候、此段得御意度如斯御座候、以上

野口友次郎

五月八日

追啓、当所方ハ手綱へ今朝届ケニ相成申候、今日中坂上御陣屋へ松岡方御届ケ可申ト奉存候、私方方之申立後レ申候而ハいか敷、何卒右之段ハ其元様より早速御陣屋へ御届ケ可被下候、已上

△

大津濱江異船近寄二里程之所ニ而元船方伝馬舟ヲ四艘程下ケ候所ニ而御注進致候趣走り馬ヲ以テ川尻庄屋迄配符相届キ申候、仍而此段御届ケ申候、以上

川尻村庄屋

彦衛門

五月八日

△

足輕善藏儀不行跡ニ而口論等ヲ度々致候故頭方四日夕

二呵被申付、日数五日ニ而五月八日朝免許ニ成、出勤
致候

△ 為損知候節ノ替之角板、^{*}樟木等御矢倉方方佐野七郎兵衛へ御渡シニ相成候故佐野方請取、御藏へ入置申候

△ 戌ノ年御渡シ蠟燭三拾丁之由ニ候所、亥ノ年五月十六日ニ数ヲ改申候所式拾九丁ニ候、尤右之内ヲ忝丁遣イ候故残り式十八丁ニ成ル、則御土藏へ入置申候

△ 五月十六日異船壹艘田尻沖合ニ而三里程ト相見、尤八ツ半頃方寅卯之方へ走り行申候、尤異船見へ候ニ付我等月番故足輕共拾五人召連川尻尻へ備ヲ堅メ居リ候、且ツ夜五ツ時頃迄ニ引申候、暮ニ到リ而上方御渡シ之高張へ御渡シ蠟燭付立置申候、蠟燭之儀ハ式拾目懸忝丁遣イ申候

一 佐野七郎兵衛并小宅権之丞儀者非番故足輕共式タ組召連小木津尻へ備ヲ堅メ居ル、尤足輕共へハ兵糧ヲ被下候、小木津庄屋より仕出シ候

一 我等召連足輕共へハ川尻村庄屋方兵糧仕出シニ相成候、兵糧忝度分白米三合三夕

△ 前へ書申筈ニ候得共此所へ印シ置ナリ、五月八日ニ大津村、磯原村等へ異船見へ訴ニ付火急御達ニ而佐野七郎兵衛九日之暮方御城下出立ニ而川尻へ十日朝五ツ時着ニ相成候、佐野相詰候故海岸足輕共五人宛日之内計詰切ニ成ル

(貼紙)
「五月十六日、異船見エ節日暮ニ至り霧り沢山故異船行方不分、猶又沖合漂イ居候哉之程難計故固引取候、跡ニ而小木津濱ニ而一ヶ所篝火ヲ焼セ申候、川尻ニ而ハ

波切不動立候所ニ一ヶ所篝火焼セ申候

△ 磯ノ濱へ茂十六日十七日ト両日異船相見へ候趣承リ候

△ 一 河原子へ茂十六日ニ異船見へ候付相図ニ而足輕等ヲ集メ、岡部、武藤等迄御陣屋内ニ而屯致、尻へハ出張不致由承り申候、尤異船陸方壹里半位ト申事ニ御座候川尻村足輕萬四郎母病死ニ付佐野へ申出候所、忌引トシテ七日引申付候 一 石濱^{*}村足輕次左衛門母病死届ケ申出ニ付五月廿日方七日忌引申付候、尤忌引中ニ而茂異船見へ候節罷出候様申付候

△ 足輕五人宛詰切之所、盛農之時節故五月廿一日方式人宛屋計詰切ニ相成候

△ 六月九日朝方快晴ニ而北風強ク吹申候故カ丑寅ノ方異船壹艘走り通り、尤川尻陸よりハ壹里程ト見エ申候、八ツ半時頃方七ツ頃迄ニ南之方へ走、帆形更ニ不見エ申候、且又相図之員ヲ吹キ足輕共ヲ集メ候所走り通り、故ニ海邊固メ無ク御役家詰候而已ニ候

一 同月同日河原子沖合ニ致而ハ陸地ヨリ拾四五町位ニ漕寄、少シノ内漂候様ニ見へ、従夫辰巳之沖合へ日暮迄ニ帆形モ不見エ走り行候趣同列より申来り候、乍去前書之通り近寄候得共海邊へハ罷出不申御陣屋内ニ定詰、同列、郷足輕等迄詰居り候由承候

△ 同月十日、十一日ト両日大津沖方平潟沖合邊ニ当り石濱方相見エ候趣承候

(抹消)
「△清水式部卿様去ル十日御逝去ニ付普請ハ昨十二日迄、鳴物、殺生、武藝、目当鉄炮者来ル十六日迄御停止ニ

* 損知…損じカ。

* 樟(シユ・シヨウ)…とばりの柱。

* 石濱…多賀郡伊師浜村。

有之旨、御達有之候条其旨御心得可被有之候、已上

六月十三日

梶清次衛門

十四日朝届ク

△ 六月廿一日、佐野七郎兵衛於石濱尻ニ足輕合致候、從

夫佐野氏持場海岸ニ石滝迄廻り候ニ付、非番故小宅權

之丞并足輕拾人召連申候、我等儀者月番故為留守居石

濱方足輕拾五人召連歸陣致候

覚

△ 荏油貳合 代八拾八文

右者此度油御用ニ付指上候所、前書代鏝慥受取申候、以上

六月廿二日

折笠村

油屋長介

小宅權之丞様

大内勘衛門様

覚

一 延紙反古 五百枚 但シ目方 三百七拾五匁

直段百目ニ付百拾九匁

右者此度反古御用ニ付指上候所、代鏝前書之通り御渡

シ被下候間慥受取申候、已上

六月廿六日

友部村

大次郎

小宅權之丞様

大内勘衛門様

一 油仕切書付并反古仕切書付等貳枚受取、六月廿七日

二 佐野七郎兵衛宿陣へ持参致相渡シ申候

一 足輕稽古矢場砂不足ニ付海岸之者ニ砂は(ひ)申付はこ

び候、足輕名前左通

一 六月十四日 砂取名前

(萬四郎 弥次衛門)

一 同月十五日 同断

(庄介 市郎衛門)

一 同月十六日 同断

(要藏 吉郎衛門)

一 矢場草取候海岸足輕名前左之通り

(栄次郎 要次郎)

一 六月十八日

△ 御武器虫干閏六月十七日方羽立申候、尤虫干手伝足

輕之儀ハ海岸者詰切故召遣申候

閏六月十七日ニ具足拾領干

手伝 (治左衛門 栄介)

同 十八日ニ具足貳拾領干

手伝 (七五郎 寧藏)

同 十九日ニ具足貳拾領干

手伝 (衛門 彦衛門)

同 廿日ニ鉄炮五挺

手伝 (善藏 介八)

同 廿一日ニ鉄炮拾五挺掃除研

手伝 (萬四郎 弥左衛門)

同 廿二日ニ幕并小頭具足、役羽織

手伝 (市郎衛門 庄介)

同 廿三日ニ渋紙、合葉、胴乱、笠、雨革等干

手伝 (要藏 吉郎衛門)

一 折笠村足輕清三郎、母病氣之所養生不叶廿一日ニ

相果候趣申出ニ付、忌引一七日為引申候、尤葬式見送

り之節ハ帯刀致候様佐野氏方免許ニ付、帯刀ニ而送り

申候

△ 矢場草取掃除等海岸之者致候 名前左之通り

閏六月廿五日

(要次郎 要七)

△一 アツチ砂取等海岸之者ニ申付候、名前

閏六月廿六日

(吉衛門
市兵衛

一 閏六月廿七日

(藤左衛門
彦八郎

△ 前江認め留置可申之所此所書置申ナリ

亥(文政十年)五月九日火急御達ニ而佐野七郎兵衛同
十日朝四ツ頃川尻へ着ニ成ル、従夫海岸廻リニ佐野氏
我等同道并足輕共拾人召連レ小貝臺迄罷越陣致候、
長詰ニ而七月迄詰メ候所、同月五日九ツ時中村与一左
衛門殿ヨリ引取候之御達シ届ク、中一日逗留ニ而七日
川尻引払、御城下へ着ニ成ル

△

別紙之通り足輕共閏月分御扶持願相濟申候而御同様大
慶ニ存候、尤右願ハ再初吉村、梶兩人ニ而願候所不相
濟願書御下ケニ相成候ニ付、小泉、我等、梶三名ニ而
再応願候而相濟候事ニ而、同役小泉ハ大キ骨ヲ折候事
ニ候間格別之義に候、仍而ハ足輕共へも兼子方其趣口
上ニ而申通シ候様御伝可申候、鉄炮稽古等も当月限り
ニ候間、一同心ヲ付打候様是亦兼子方御伝させ可申
候、以上

七月十日

兩名ニ而来ル

佐野七郎兵衛

△一 七月七日御達シ之写シ

吉村侍衛門、梶清次衛
門、佐野七郎兵衛、小泉伝三郎江

一 川尻村等三ヶ濱郷足輕へ閏月分御扶持方被下之儀願
之趣有之候所、右足輕御仕立之砌再応申出も有之、
老ケ年粗拾式表宛被下置候筈ニ而召抱之事ニ付、閏月
分被下者難相濟義ニ候得共、打続鉄炮稽古ヲ茂致出精

猶異船折々相見江海岸見廻リ等別而大義ニ茂有之候

由、再応申出も有之ニ付、当年ニ限り格別之義ヲ以閏
月分老人江粗老儀宛被下置候条其旨可被相心得事

△

小木津村郷足輕吉衛門儀湯治願イ相濟候処、湯治ニ
茂不罷出欠落等致候故、病氣ト申出暫ク勤ヲ引居り候
処、漸々ニ尋出病氣快氣ニ付出勤ヲ届御奉公相勤候得
共、常々不行跡ニ付頭呵被申付候、佐野氏ヨリ達書左
之通り

△

一

郷足輕

吉衛門

其方義先達而湯治御暇願指出シ罷越候処、途中方病氣
ニ而立歸り候趣ニハ有之候得共、不心得之趣相聞候、
畢竟常々心得不宜候故之儀呵押込申付候間、吃ト相慎
可罷在者也

八月十日、夕方月番小宅ニ而我等并小頭忠兵衛出座ニ
而達書ヲ小宅読為聞申候、其節吉衛門呼出シ時分組役
市郎衛門同道ニ而罷出候事

(袋綴内史料挿入 後掲2)

△

書添得御意候、当五月中我等詰候節方七月晦日迄足輕
共夜廻り申付候振ニ筋江申出候間、足輕一同小頭等ニ
も右之心得ニ罷在候様御申達可被下候、尤右次第者儀
濱、川尻共ニ五月中方夜廻り等も申付候事ニ而小身之
者大義ニも御座候間、閏月御扶持方被下置候様仕度ト
願書江も相認候而指出、閏月御扶持被下ニ相成候事ニ
候間、小泉、我等申合夜廻り為致候日数等申出候事ニ
候、依而足輕共一同夏中夜廻り致候心得ニ無之候而ハ
都合不宜候間、此段一同江宜敷為吞込候様兼子江も御

*アツチ…あずちカ。塚・棚・安土。的弓の施設。的をかけるために弓場の正面に設ける山の盛り土。

咄シ、猶亦足輕共各方江も罷出候節御嘶可申候、此段得御意度如是御座候、已上

小宅我等兩名ニ来ル

佐野七郎兵衛

八月十九日

(袋綴内史料挿入 後掲3)

△ 以書付致啓達候、先達而足輕吉衛門呵押込申付置候処、今日差免シ候間此段相達候様御達可被成候、已上

佐野七郎兵衛

八月十九日 小宅我等兩名ニ来ル

右之通り相認メ差越置候間、日数十日ニ而御指遣シ可被成候、已上

(抹消)

△ 去ル廿四日夜丑刻小石川御屋敷 御殿表方出火、

御本殿、御守殿共不殘御焼失之旨御達有之候条其

旨御心得、尤右之御儀ニ付為伺 御機嫌役所へ御

越ニ不及候条旁御心得可被有之候、以上

梶清次衛門

十一月廿七日 廿〇日五ツ頃届ク

△ 小木津村足輕市兵衛病氣ニ付、組役彦八郎ヲ以テ病氣之所小頭へ届ケ候ニ付忠兵衛方左之通り申来り候

口上

△ 郷足輕市兵衛義病氣ニ付、組役彦八郎方願出有之候、

依而今日より為御引候様申付候趣廻文ニ而組役中へ

申達候間、此段得貴意「」以上

十一月晦日

兼子忠兵衛

佐野氏ヨリ小宅へ文通之写左之通り

△ 其後も御文通有之候所、此節之事ニ而取込候間御報

も不申候、其節御状ニ足輕共老本刀心得違無之様、猶

又野羽織之事御達被成候趣御運之処、尤忠兵衛方迄御

達之趣致承知候、然所幸兼子罷出候間承候処、平輪着

用之花色野羽織江我等相印ヲ付候様ニ兼子へ御嘶之趣

ニ候処、是ハ大キニ行違ニ御座候、頭之相印付候羽織

ハ全上方被下候之外ニ者不相成事ニ候、是ハ諸同道心

共ニ左様ニ候、手前羽織江者相印付候義者不相成候

間、心得違無之様足輕共へ茂委細申談遣候、一騎本渡

リハ先達而御達ニ而御用之外彼羽織ハ着用不相成御達

シ有之候間、平輪海岸廻り之節、習シ致候節、海防御

用ニ而罷出候節、此三度ニ限り為着候様筋江茂申出置

候事ニ候、手前羽織、割羽織^{*}ハ不相成事ニ候間見濟置

候事ニ候、依而印等付候而ハ決而不相成候間、此段御

承知被下候
亥十二月廿二日

(文政11年)

文政十一子ノ正月方之留メ

△ 以書付致啓達候、郷足輕小木村市兵衛儀病身ニ付役儀

依願ニ昨廿三日令免許、後職同村新八ニ今廿四日申達

候間此段得御意一候、已上

子ノ正月廿四日

後藤孫左衛門
清水茂兵衛

△ 小木津村新八足輕ニ御召抱ニ相成候ニ付、頭佐野七郎

兵衛宅罷出候ニ付、組頭彦八郎同道可致筈之所、彦八

郎病足ニ而出兼候故、川尻村介八佐野へ年始ニ罷越候

ニ付幸ニ介八ヲ頼、新八同道ニ而正月廿六日ニ御城下

*病足…やみあし。病気にかかっている足。

*割羽織…さきばおり。わりばおり。武士などの帯刀の便をはかって、羽織の背縫いの下方を縫いつけずに割ったもの。ぶっさきばおり。

佐野七郎兵衛宅へ罷出、廿八日帰宅致候

(抹消)

△ 来月五日勝倉村*於長者山ニ御鹿狩有之趣御達有之

二付、右御狩江罷出候者ハ姓名御目附方江申出候間、罷出候ハ、其段来ル廿三日迄ニ無延引役所江御申出可被有之候、尤不罷出候ハ、否被申出ニハ及不申候

二月十八日

梶清次衛門

猶々御鹿狩押前等之義都而跡方之通与被仰出候間、

其旨御心得罷出候ハ、御狩日限明ケ七ツ半時晴雨

不限カツ倉村長者山屯場江屹ト相揃、着届ケ者於

其場所ニ同列之内申合、一紙覚書ニ而御目附方部

類江可被相届候、且差掛リ病氣等ニ而難罷出節ハ

同列ヲ以是又屯場御目附方部類江相届候様旁御心

得可被有之候、已上

二月廿三日夜無事ナリ

△ 小木津村足輕平兵衛女房安産ニ付組役彦八郎方安産

之趣小頭へ申出ニ付、血忌引日数三日相引様申達候由

ニ而忠兵衛ヨリ届ケ有リ候

二月廿四日村々方附来リ候

△ 異船見エ候節篝火之御手当真木庄屋へ御渡シ之処、右

真木置処ニ困リ候ニ付、庄屋方ニ而役所伺江候処、川

尻御役家へ指置候様庄屋へ達ニ付、庄屋小宅権之丞へ

掛合、御土蔵之前へ積置候様指図致候趣權之丞參リ我

等へ咄シ有候

△ 玉代被下候分

一 總五貫六百八拾四文 廿六人分

但老人ニ付 總式百八文

一 鉛三貫式百五拾目 代金三分小式朱 此總五貫四百三文

一 式百六拾四文 蓋付手桶式ツ

一 鉛壹両ニ付四貫目直段

一 三月七日足輕共稽古初メ申候、尤玉^{ミイ}五ツ宛打申候

△ 一 川尻村足輕彦之丞ユジマタ^{*}エ入湯ニ罷越度ニ付、小

頭忠兵衛方へ願出ニ付、右忠兵衛老人之了簡ニ而相濟

候由忠兵衛方届ケ有リ候、尤彦之丞湯治ニ出立者当

月廿日方、帰宅ハ当月末之由ニ候

三月十九日ニ候

彦之丞湯治場方帰宅届ケ申出候

△ 一 今五ツ半時当濱方辰巳沖ニ異リ候帆形相見へ候ニ

付、若異船ニ茂可有之哉ニ存居リ候折がら、水木村異

国番^{*}罷出、右村方三里程辰巳沖合ニ帆三ツ引由異船相

見候旨訴出候得共、汐霧深ク異船共見定堅ク、左候内

帆形見失、異船、廻船之訊ケ不相訊候処、七ツ半頃河

原子村漁師半三郎、弥次郎ト申者右村方三里程沖ニ漁

業致居リ、右場所方三里程辰巳沖ニ異船壹艘北沖へ走

り候様、尤間もなく帆形見失イ候得共直様帰船、異船

ニ相違無之候旨訴出候ニ付濱廻リ等手当申付候、此段

御心得ニ申達候、已上

四月十六日 十七日五ツ時届ク 梶清次衛門

尚々佐野七郎兵衛へも本文之通り心得ニ及通達候

一 子ノ四月廿一日、異船壹艘卯辰之沖方八ツ時頃走り

出シ、丑寅之方へ引候模様ニ見エ候処、餘り走り茂不

致暫ク漂居候、尤陸方五里程ト云者有リ、又三里位ト

*勝倉村…かつぐらむら。那珂郡。現ひたちなか市。

*押前…おしまえ。戦場に進むこと。進軍。行軍

*部類…ぶるい。仲間。同類

*ユジマタ…湯岐。湯岐村は陸奥国。現福島県東白川郡塙町。

*水木村異国番…多賀郡水木村に正保二年(一六四五)水戸藩の異国船番所(遠見番所)が設けられ、文化五年(一八〇八)に大砲が配備された。

見申候者、何れトも定堅候、暮方ニ成リ又々卯辰之方遠沖之方へ走り出シ、夜入帆陰ヲ見失イ候、尤篝リ為焚可申ト存候ニ付、庄屋元人足申越候所、人足不遣ス故篝不為焚候、且又高張付候故高張持人足茂時分柄簀多故指出兼候趣ニ而人足不参ニ付持人無、故無扱源次ニ高張為持相引申候

△ 以書付致啓上候、今七ツ頃当所陸方式里余東沖ニ異船壹艘相見候付、足輕等相図を以相詰、御道具等用意致置候処、当時者漂居候様子而已ニ相見候間、夜中者篝為焚、濱廻り等夫々手当申付被置候事ニ御座候、定而御地方茂相見、御承知之事トハ存候をも此段御心得ニ得御意候

四月廿一日 西川与一郎
清水茂兵衛

△ 御渡之蠟燭式拾八町之内廿一日之夜壹丁遣イ候、尤残式拾七丁御蔵エ人置候

△ 四月廿一日、同廿二日、同廿三日ト北濱ニ異国船相見エ候ニ付、手繩ヨリ御城下へ注進之飛脚通り候由承り候

△ 四月十六日五ツ半頃磯濱陸より一里計茂沖ニ異船壹艘相見、間もなく走り去候申出有之由佐野方申来り

△ 四月廿三日夕方、霧之内ニ異船ニ異り船壹艘見エ候ニ付漁業者共ニ承り候所、異船無相違由二者候得共、異国番所之御目鏡ニ而為見候所、仙臺船之由異国番人申候ニ付夫而已致置候得共、異船ニ無間違、諸人見請

候ニ付夜廻り海岸申付候、尤川尻濱手当善藏、作之丞ニ申付候、小木津濱夜海岸手当者新八、吉衛門へ申付候、且ツ御笠并弓張等ハ折笠庄屋方人ヲ貸リ小木津濱へ送り申候、尤小木津海岸為廻候、取扱ニ者船庄屋ヲ頼み候

一 佐野七郎兵衛持場為見廻ト四月廿四日ニ川尻着、廿五日足輕共鉄炮之見分致候、一 廿六日石濱瓦ニ而平均ヲ致候、一 四月廿五日ヲ夜廻り初メ申候

△ 以書付致啓上候、大津浦陸方式里程沖合ニ異船壹艘相見申候、模様次第追々可得御意候得共、直様走り出候ハ、及其義ニ中間敷候、右為御心得ニ得御意候、已上

五月七日巳ノ中刻出、申ノ刻ニ届ク
西丸勇次郎

△ 以書付致啓上候、今朝五ツ半時大津村沖合ニ異国船壹艘相見申候所、大図三里程沖合ニ而帆形計相見、船形等シカト相分り兼申候、尤空も快晴ニ無之、霞之中ニ御座候間分明ニ相分り兼候得共、異船ニ相違無之候、船も餘り大船ニ茂無之様子ニ御座候、此趣村方別高江も注進ニ相成申候間、私方方も御役家并ニ坂上御陣屋江も相運ビ申度奉存候、何卒貴所方早速御通達可被下候、此上事異り候義ハ早速御届ケ可申候、再度御陣屋江も御運ヒ可被下候、猶追々可申上候、已上

五月七日七ツ過ニ届ク
野口友次郎

口上書之写
一 今巳刻当浦陸方式里程沖合ニ異国船壹艘、巳下刻江

*別高…水戸藩附家老中山氏の知行地

名沖邊ニ異船壹艘、南御領内沖ニ異船とも覺敷船壹艘
相見候得共、睨と不相分候、只今ハ遠沖江走出、壹艘
四五里沖ニ相見江候計ニ御座候、此段御住進申上候、
以上

西丸勇次郎*

子(文政十一年)五月七午中刻七ツ半過キ届ク

△ 御渡シ之角板打破候ニ付、佐野七郎兵衛歸陣之節遣シ
候所、引替候趣ニ而宿次^(兼)ニ而五月八日相届キ申候故、
角板受取認佐野へ相廻シ申候、受取文言左通り

覚

一 角板壹枚

右者は迄御指出之角板相破候ニ付、此度御引替ニ而御
渡ニ罷成候間、慥ニ相請取申候

子五月八日

小宅氏印
大内氏印

(抹消)
「二 白羽村獵師善次郎病死ニ付、立代同村藤次郎願ニ

付上土木内御山横目川崎与衛門之撰書并願書取揃、

清水茂兵衛、佐川与一郎両人之名宛ニ而子五月八日

川尻村方仕出シ申候

△ 此間風説ニ承り候ヲ認メ置物ナリ、去ル五月四日当地
漁業流船式拾立位之海ニ渡世致居候所、異船方伝馬船
四五艘下ケ漕来り間、次第近寄候ニ付、漁業者共恐敷
ク成、流網ヲ捨テ^(逃)にケもどらント相談に及候所、老
之船方申候ハ、何れニ成ル共居り見可申ト申ニ付、其
者之意ニ任、渡世ヲ致居り候所、右船ニハ不^(マ)かまハ陸
之方へ漕来り候由承り候得共、寔ニ蜜々物語りノ由
ヲ聞候者小子へ内々ニ而嘶候

△ 足輕共自分ぼんぼり^{*}江頭之紋相印ヲ付、異船等之節用

度趣之願小頭ヲ以テ頭へ願イ候処、則濟口之達書小頭
忠兵衛へ申来り候書付之写シ左之通り

○ 足輕共方申出有之候自分ぼんぼり江我等紋相印等付候

而異舟相見江候節相用申度由ニ付、同役伝三郎江問合
候処、磯濱ニ而茂伝三郎相渡置候通り之ぼんぼり自分
物沢山出来置、異船、難波船等之節相用候事ニ付、依
而ハ川尻足輕共茂勝手次第二自分物出来我等相渡置候
通り印等書候而相用候様御達被成候、此通り佐野方忠
兵衛へ申来り候ニ付、則五月八日ニ忠兵衛宅へ足輕召
呼相達シ趣忠兵衛方申出候

△ 六月十四日、小宅月番ニ而足輕具足式拾領虫干いた

し候、尤手伝作之丞、貞藏式人ナリ

△ 漸快晴ニ罷成、御同様□□仕候、伊師濱村郷足次左

衛門義病氣ニ而願出有之候間為相引候様申付候、依而
者右之趣得貴意度如此御座候、已上

六月十七日

一昨十六日方為相引申候

兼子忠兵衛

△ 六月十九日、足輕具足虫干、尤四箱ニ而式拾五領ニ

候、但シ箱壹ツ江六領入七領入之箱壹ツ有り、且又箱
壹へハ小手十、上帯十本入有り

手伝(善藏)
(七五郎)

△ 六月廿日、騎馬具足壹領、小頭具足一領、足輕具足

五領、御幕壹封、役羽織、火繩、胴乱、雨革等其外品
々入箱都而箱四ツ虫干致候、尤手伝之者

折笠村(栄次郎)
(吉郎衛門)

* 西丸勇次郎…大津村の郷土。
* ぼんぼり…竹の手のある角ちようちん。

△一 六月廿一日、虫干ニ渋紙拾式枚并鉄炮拾挺洗研
手伝之者 小木津濱(新)八
(藤左衛門)

○一 六月十七八日分之由ニ候所、河原子へ異船見エ候趣

安島忠大夫ヨリ小宅へ文通由、小宅嘶ニ承り申候
△一 六月廿四日、鉄炮拾挺洗研、手入之者

折笠(市郎衛門)
(要次郎)
△一 六月廿五日、鉄炮拾挺洗研、手入者(弥次衛門)
(兵藏)

○ 小木津村足輕吉衛門儀病氣ニ付小頭へ病氣願ニ付今六月廿五日ヨリ勤為相引候趣忠兵衛ヨリ届ケニ候

(抹消)
「一 明廿五日 中納言様峰姫君様小石川御殿江御引移
可被遊旨被 仰出候条、其旨御心得可有之候、已上

六月廿四日 梶清次衛門

△一 六月廿六日、矢場掃除、砂取小木津(彦八郎)
(平兵衛)

△一 六月廿八日 胴乱、火繩・鉄炮之雨革笠并大筒之
薬等迄干申候、手伝之者 折笠村(庄介)
(要藏)

△一 六月晦日ニ川尻村彦五郎ト申者鮑取渡世ニ出船致、
小貝邊ニ而獵致居候折異船老艘見付候得共、無間霧
深故見ウシナイ候由相嘶候ヲ小宅承り候由ニ而、七月
二日ニ我等へ小宅相嘶候故留置ものナリ

△一 作之丞病氣ニ付願出候故勤メ今七月三日方為引候由
忠兵衛方権之丞へ届ニ候ニ付小宅方我等へ咄有之候

○一 石濱村方角板木かつき候者之名前左之通り、介八、
彦之丞、要七 忒度勤候、庄介

○一 小木津村吉衛門病氣快氣ニ付七月六日出勤致候

○一 川尻村足輕作之丞病氣全快ニ付七日出勤致候趣沙汰
ニ承り申候

△一 荏油 三合代百四拾八文

右者此度油御用ニ付指上申候所、前書之代鏝髓ニ受取
申上候、已上

子七月十五日 折笠村 油屋長介

小宅、我等宛

一 延紙反古五百枚 但シ目方三百六拾四匁

直段百目ニ付代百拾六文

代々四百式拾式文

右者此度反古御用ニ付指上候所代鏝前書之通り御渡し
被下候間髓ニ受取申候、以上

川尻村

文政十一年子七月十五日 南部屋伊兵衛

小宅、我等宛

反古買上ニ付承り候所反古無之故反古買上ケ書付ヲ
取、紙之儀新延紙七状買上申候、尤代鏝ハ式百四拾六
文、代相払申候、且ツ新延紙百枚ニ而目方九拾老匁ナ
リ、是ハ紙之厚薄ニ而格別目方相違有ル事ト見へ申候
○一 足輕共自分燈^(燈籠)出来ニ付、夜廻り之節相用初メ候、
日限ハ(以下闕)

△一 足輕共夜廻りは迄申付置候処、前件得貴意候通打続
静ニ候間、当月晦日迄ニ而相止メ候而も宜敷様ニ存候
間、右之段小頭方へ御申達、足輕共一同江相達候様御
達可被成候、磯濱杯も晦日切ニ而夜廻り相止メ之事ニ
相見申候、尤其内異船ニ而も近ク相見へ候事ニも候

ハ、不時ニ夜廻り御申付可然候、其外之文牒ハ略ス、如此佐野方申来り候ニ付、忠兵衛方へ手紙ニ而申遣シ、忠兵衛方不残へ廻状ニ而相達し申候

△一 此之佐野方手紙ハ七月廿五日仕出之状廿七日暮方届候
△二 夜廻り儀七月晦日切候、翌日ヨリハ朝夕廻り候

(抹消)

〔一〕 此度小石川臺江御出来之 御殿、以来富士見御殿下相唱候様御達有之候条、其旨御心得可被有之候、已上

七月廿九日

梶清次衛門

」

以書付致啓達候、残暑立歸り候処愈御安康ニ可被成御勤珍重之御事ニ存候、然者各方年来之精勤ニ付同役伝三郎、清次衛門等申合御慰勞願指出候間、御兩人武藝、兵学、軍用火術等免許、指南免許等詔書付も御認メ御指出可被成候、尤我等心得候扣置候間委敷御認メニ致度御坐候、日限も八月中旬迄ニ御指出候間、早速ニ御仕出ニ相成候様致度御座候、此段得御意度如是御座候、已上

七月廿七日

佐野七郎兵衛

尚々先便書状反古、油売上書付之義得御意候処、大内氏方御仕出之御状行違ニ相成、昨廿六日来着、売揚書付も相届キ近々受取次第御廻可申候

兩人宛ナリ

(抹消)

〔一〕 私儀積之気味ニ御座候間、折笠村玄道下申者ニ為相見薬養仕候得共未宜無御座候、故右玄道被申候者奥州湯岐温泉入湯仕候ハ、可為宜下申候間、右温泉

入湯仕度奉存候、何卒道中之外日数ニ廻り御暇被下置候様奉頼候、以上

文政十一年子七月

大内勘衛門

△一 八月十五日、本陣野平ニ而足輕合致候、尤其節不参者ハ介八二候、是ハ磯濱へ参り、猶又佐野氏へモ立寄候趣候得者病氣ト申立テ不罷出候、彦八郎ハ空病氣ニ候

(抹消)

〔一〕 武公様十三回御忌ニ被為当候ニ付、明後十七日方同十九日迄鳴物、殺生御停止、普請、武藝者御当日十九日計御停止之旨御達有之条其旨御心得可被有之候、以上

八月十五日出十六日朝届ク

梶清次衛門

以書付致啓達候、奥州湯岐江往来之外二廻之御暇ニ而御入湯被成度旨御願之通相濟候間、其旨御心得往還出入共御目附方へ相届候様旁御達御座候間、御出立日限之儀者前日役所へ御申出御座候様致度候、此段旁得御意候、已上

八月十六日

榎村富藏
後藤孫衛門

△一 八月廿一日、佐野七郎兵衛持場見廻り川尻ニ着致候、宿陣者酢屋半兵衛宅、尤廿二日ハ休日ニ候、廿三日石濱村砂瓦ニ而足輕合ヲ致、右村庄屋宅ニ而昼食ヲ遣イ、従夫鎧、鎧、鉄炮、馬等ヲ歸し苜苜へ相廻り候人々佐野、小宅、兼子、足輕ニ而ハ清三郎、次左衛門等ナリ、我等儀者月番故ニ足輕共召連レ小貝通りニ而

*二廻り…湯治や服薬療法などの日数について、普通、七日を単位として、一まわりという。

*武公…徳川治紀。水戸藩第七代藩主。文化十三年八月没。

帰宅致、御道具等ヲ調テ御蔵へ相納メ候、□□□佐野休日之処尤廿五日帰陣□□触□出候、尤廿三日石濱ニ而足輕合致候節我等手に付候足輕共三組之名前左之通り、弥次衛門一ト組、市郎衛門一ト組、彦八郎一ト組、都合三組ナリ

一 廿四日ニハ休足致、廿五日ニ佐野氏帰陣致候

以書付致啓達候、次第二寒冷相催候処愈御安康可被成御勤珍重之御事ニ存候、然者先便薄々得御意置候足輕笠五拾御引替ニ相成候間、御矢倉方向合引替候様昨廿九日御筋方御達ニ相成申候、仍而ハ御取調引替ニ御指出可被成候、此段得御意候、已上

十月朔日

小宅権之丞様

佐野七郎兵衛

尚々本文引替之義、実ニ此方へ此度御渡ニ相成候笠受取候上ニ而相納候而宜存候、其方之笠持出シ引替候而ハ跡明キ申候得共、夫ニ而ハ二度不罷出候而者不相成候、此節者異船も不相見時節ニ候間、跡明キ候而茂宜様存候間、直ニ持出引替ニ而宜様存候間、其御調ニ而御指出可被成候、尤小頭代之笠共二者五拾老御渡ニ相成居候得共、御矢倉方五拾引替候様達ニ有之候間、老ツ者相残シ五拾引替ニ御取扱可被成候

一 引替日限者当七日方宜候間、其方取調相濟候ハ、六日ニ此方迄罷出居候而七日引替ニ可致候、御承知之通御矢倉方ハ四ツ方八ツ迄之間ニ無之候間ハ役所

相引ケ候間、宵日ニ罷越居候様御取扱可被成候、尤七日引替ニ取調間ニ合兼候ハ、十四日之積リニ而十三日旁御指出可被成候

一 引替ニ川尻方持人之義ハ御武器之義ニ候間、川尻庄屋へ御申付、御用歩夫ニ而宿次^兼二歩夫御当可被成候、引替人者小頭へ罷出候間宜候間、小頭御用指合等ニ候ハ、組役之内ニ而老人、外ニ老人、兩人付添罷出候様御取扱可被成候

一 足輕共等へ本文御達シハ例之通り小頭へ御達、小頭方一同へ相達候様御取扱可被成候、前広^{*}ニ其元方足輕共へ御嘶シハ御無用ニ候、右御心得ニ而宜御取扱可被成候

一 御同勤者未在所逗留之届のミニ御坐候間、不快得ト不致逗留之事と存候、今程帰宅ニ相成候ハ、宜御相談之上御取扱可被成候

十月朔日出之書状六日ニ届キ申候

石濱村足輕榮介眼病ニ付組役ヲ以テ願出有之候而昨日方為相引候間、此段為御心得得責意度如此御座候、已上

十月八日

兼子忠兵衛

如此小頭方申来り□□

海防為御手当ト三ヶ濱へ御指出シニ相成候金輪之御印付候陣笠、此度御引替ニ相成ルニ付、十月十四日ニ組役作之丞才料ニ添、猶亦平組之者老人遣シ申候、尤参り候者ハ折笠村要次郎ト兩人ニ而伝馬ニ笠五拾階ヲ箱式ツ二人、老駄ニ附遣シ候

△

節ニ此度金御印之笠御引替相成候ハ農兵、獵師等へ金

* 休足・休息…きゆうそく。のんびりとくつろぐこと。仕事や歩行などをやめて体を休めること

* 前広…まえびろ。以前、前もって、あらかじめ、かねてより。

御印之笠為冠候而ハ御先手同心モ紛候而ハカリ兼候ニ付、此度方朱輪之御印之御笠御渡シニ相成候

△ 右笠御城下佐野屋敷迄相送り候ニ付、伝馬先触小宅名前ニ而指出シ候、則先触之文言左之通り

一 伝馬老疋

右者海防御手当御用御武器之内此度御引替ニ付、明十三日川尻村明ケ六ツ時出立ニ而相送り候条、前書之馬庄や元へ寄居、無遅滞早々送り候様可被致候、已上

十月十二日

小宅権之丞

新寺橋

佐野七郎兵衛様迄

(小木津 介川 下孫) (大沼) (大橋)
(田尻) (森山) (田中々)

石神外宿 沢 枝川方

先触十三日立ト相触候所、十三日未明方大雨ニ而十四日ニ日ヲ送り申候

△ 御笠引替ニ作之丞、要次郎兩人ニ而佐野屋敷へ罷出候ニ付、御矢倉方へ罷出候様佐野方申被付ニ候故兩人江佐野之若党付添ニ而御本 城御矢倉方へ罷出、右御笠数改相納申候、尤御矢倉方御渡し之御笠朱丸之御印付五拾階御渡シニ付受取人方受取指出候趣相嘶有之ニ付、文言等之儀承り候所、合々ヲ脱落致候由故覚居り候所計留置者ナリ、左之通り

覚

一 塗笠五拾階 但シ此所之文言脱落之由
右者海防為御手当金笠五拾階指出候所、此度朱笠ト御引替ニ相成候所、吟味之上無相違請取申候、以上

文政十一年 佐野七郎兵衛組
子十月十六日 郷足輕赤須作之丞

御矢倉方役所

右之通り相認メ指出シ候由ニ候

一 佐野方作之丞へ口上ニ而申遣シ候ハ、向後何等之御用ニ而罷出候節者道中ハ格別ニ候得共、役羽織ヲ持參致候様取扱候趣申つた候ニト被申付候ト由ニ候

(文政12年)

文政十二年丑分

一 玉代并合薬等佐野七郎兵衛御矢倉方受取置候ヲ折笠村郷足輕要七御 城下へ三月三日出立ニ而罷越、御城下ニ二タ夜泊りニ而五日帰宅致、渡り品々左之通り

覚

兩二四貫百目直段

一 鉛三貫七拾五匁 廿六人分 但シ老人前百拾八文式分

一 合薬六貫式百四拾目 但シ老人前式百四拾目

右之通り割合可申候

一 三百文 蓋付手桶式ツ

一 四百文 鉛代過鏢

小頭代 菊地忠兵衛

郷足輕組役衆中

以書付致啓達候、此度濱々御武器為手入見分御矢倉手代兩人来月三日発足ニ而磯濱方河原子、川尻と相廻り候趣別紙之通御矢倉奉行中方去ル十七日申来候間、定而来月五日六日方ニハ川尻へ罷越候義と存候、御矢倉奉行中方之前紙写御廻申候、御熟覽之上前日都而御武器等御取調、損シ有之候分ハ御手入ニ御指出、其余ハ

見分ニ御指出可被成候、尤前日ニ御取調之節ハ小頭并ニ足輕三四人茂御呼出シ、得ト御見分置可然存候、猶亦御矢倉方見分之節ハ定而御用坐敷ヘ取揃候而見分致者也候事と存候間、小頭、足輕等可然程御呼出置宜御取扱可被成候、此段得御意候、已上

三月廿日 兩人宛

佐野七郎兵衛

尚々御矢倉奉行中より之別紙書付写ハ御帰シニハ不及候
尚々本文之義小頭忠兵衛ヘも御通達可被成候

以書付致啓上候、海岸堅御用御請取置之御武器手人為見分支配指出候様其筋方御達ニ相成候ニ付、支配兩人来月三日発足、磯濱、河原子、川尻と相廻り候様指出候間、出張郷士等ヘも宜御達ニ致度存候、尤其節に至り支配方郷士江ハ可為致案内候間、巨御達ニ致度、此段得御意候、已上

三月十七日

御矢倉奉行共

佐野七郎兵衛様

御預ケ之御武器手人為見分御矢倉方、手代兩人来月三日発足、磯濱初立ニ而河原子、川尻ト相廻り候旨、尤其節ニ至り右出役之者方致案内候旨旁申来候間、右御心得宜御取計可被成候、此段得御意候、已上

三月廿四日

清水茂兵衛
後藤孫衛門

兩人宛ニ而来ル

以書付致啓上候、役所ニ而請取相廻シ候御武器、此節佐野七郎兵衛殿御手形ニ書替ニ候処、右之内荷縄不足ニ付拝借分青細引式本、此節御矢倉方ヘ返納ニ相成候ニ付、則送り書付指遣候間早速ニ御廻シ御座候様致度候、且右御請取書付之内ニハ不相見候得共、棒壺本相廻り居り候哉御糺之上可被仰聞候、尤是迄御廻ニ相成居り候御受取書付ハ近々可致返進候、此段得御意如此御座候、已上

三月廿八日

関貞介
清水茂兵衛

兩人宛

前書之通り申来り候ニ付、此方御武器之内ヲ改候処、青細引壺本過ニ見ヘ候ニ付、右細引坂上御陣屋ヘ送り遣シ申候、已上

三月廿九日ニ書状并細引仕出シ申候

(袋綴内史料挿入 後掲5)

以書付致啓上候、海防指引中江相渡シ居候御武器為見分罷越候間、明六日見分可致候処 成公様百回御忌御当日に茂有之候得者、武器ヲ動候事遠慮不致候而ハ相成間敷候、仍而者明後七日見分可致候間、御品々御取調指支無之様致度存候、且磯濱、河原子等江相渡シ居候御武器見分改候所、何れ茂手入得ト不致候、御預り之御武器ハ左ニ有之間敷候得共、御手入不宜候得ハ其由筋ヘも申立候義ニ候間、得ト御手入之上見分御申受被成候様存候、中にも鉄炮之義ハ御品柄故度々御手入無之候而ハ不相成義ニ候間、此節ハ勿論幸ひに御手入之上見分御申請被成候様にと存候、右為御案内如此御座候、已上

四月五日

尚々本文之儀ハ先達而指引衆へ頭共方御運ひ申候間
御承知之義ト存候

心得ニ得御意候

兼子与一衛門
清水 左吉

△ 四月七日ニ御矢倉方手代兩人罷越見分相濟候、尤小宅

權之丞月番故小宅御用座敷江御武器并御鉄炮等其外
之御道具不残指出為見候、且ツ御武器出シ入手伝ニ
ハ海岸当番介八、萬四郎、外ニ弥次衛門、庄介、要
藏、吉郎衛門右四人之物共ハ手伝申付候故、海岸御
用勤為引申候間、海岸之儀ハ先々江順ニ相送り申候
△ 御矢倉方封印俣ニ而請取置候合葉之儀ハ此度罷越御
矢倉封印致直シ申候

△ 四月十八日足輕共集メ平均ヲ致候、尤病氣之者名前

左之通り、暫ク病氣ニ付湯ニ罷越候七五郎、貞藏、吉衛
門、石裂山ニ参詣并日光へ廻、四月廿日帰宅藤藏、病足
ニ付高倉湯草へ湯治罷越候作之丞、栄介、此名前之内病
氣計ニ無之他行等之者も有り

○ 以書付致啓達候、去ル十五日、十六日両日湊村沖ニ異
船式艘相見候ニ付、右村方注進有之、磯濱村海防掛
り衆出張ニ相成候趣ニ御坐候間、此段御心得ニ得御
意候、已上

四月十九日

後藤弥衛門
清水茂兵衛

尚々佐野七郎兵衛殿来ル廿一日方定式御見廻り御用其村へ
御出張ニ相成候由ニ候所、定而御承知トハ相見へ候得共御

一 四月廿一日、佐野七郎兵衛持場為見廻り夜之五ツ半
頃川尻着ニ成ル、宿陣酢屋半兵衛宅、廿二日足輕共鉄
炮見分致候、四月廿三日於石濱瓦ニ平均ヲ致候、尤手
ニ付足輕共名前左之通り

作之丞組、善藏組、彦八郎組ト都合三組ナリ
一 御渡シ胴乱六ツ・鉄炮・雨革八枚損シ候御品ニ付引
替ニ佐野氏へ相渡し遣ス、尤日限ハ四月廿四日ニ候、
横木受取も同日ニ候

一 角板打撞木御渡之分大ぶりニ而不宜故、此度小ぶり
之撞木ト御引替ニ相成候ニ付、先渡り分佐野七郎兵衛
相渡し、小ぶり之撞木此度佐野方相請取申候

覚

(袋綴内史料挿入 後掲6・7)

一 角板打木式挺 右者是迄御指出ニ罷成居候角板打木
大之分御引替ニ罷成、小之分此度御渡ニ罷成候ニ付、
髓ニ相受取申候、已上

四月廿四日

大内勘衛門
小宅権之丞

如此相認メ佐野氏へ指出申候

○ 一 足輕吉衛門病氣ニ而四月十八日方引居り、快氣ニ付

四月廿五日方出勤致候

一 佐野七郎兵衛四月廿六日ニ帰陣ニ成ル、足輕共見
送り、海岸之者兩人ハ残り居候

一 四月廿三日夕ヨリ夜廻り相始メ候様佐野方我等へ

達ニ付、小頭代忠兵衛へ申付、足輕共へ為觸候

此之書面前方ハ略シ而不写

一 余者後便ニ可得御意、沖合之義ハ随分御心付次第も有之候ハ、早速御申出可被成候、此間見廻り之節御斷可申心得ニ而失念致候、此上異船相見御申越可被成候節ハ端書なしニ書付ニ御認、上包被成候而書付ニ御認、下江御両名ニ而御申出ニ致度候、直クニ若年寄衆へ指出シ申候事ニ候、尤外口上書ニ而も御添上封被成候而御越可被成候、此段御同勤へも御申合置可被成候、已上

四月廿九日

佐野七郎兵衛

一 五月八日八ツ頃辰巳沖之方ニ而大炮之音ぞツ響候ニ付、海邊ニ心ヲ付見候処、帆形等ハ更ニ不見候

一 小木津村足輕吉衛門儀常々不行跡ニ而御役儀勤難故御暇ニ茂可成筈之所、左候得ハ小木津ニ誹諧茂成り堅ク存候ニ付、小頭忠兵衛方右村庄やへ内々ヲ中含メ病心ニ而御奉公難成、永之御暇願ヲ為指出候様忠兵衛取扱申候ニ付、五月八日朝願書小頭方へ指出ニ相成候ヲ、早速ニ佐野七郎兵衛方へ相運候趣忠兵衛方届ケ有リ申候、尤願書之儀は何れノ振ニ認メ候哉一覽不致候

以書付致啓上候、昨七日七ツ半時頃より川尻沖邊ニ当り大船三艘漂居り候、内壹艘ハ帆形異船ニ紛無之様相見、式艘共帆形見分り兼異船共難極候得共、何れ漁船等ニハ有之間敷、三船共ニ日暮ニ之頃ハ北風ニ而南へ走候様

相見候ニ^(付)、夫々御手当之上昨夜筋并ニ佐野殿へも

御運相成候所、今朝ニ至り候而ハ何レ趣候哉爰元方者帆影も更ニ相見不申候、其御元ニ而者如何ニ候哉、何等之御沙汰茂無之故致承知度此段早々得御意候、已上

五月八日

樫村富藏

清水茂兵衛

此方兩人宛

以書付致啓達候、一昨七日七ツ半時頃ニ川尻沖邊ニ大船壹艘相見、船形等ハ睨ト不相分候得共、帆形等様子異船ニ紛無之趣、引続外ニ式艘相見候付相図等致、河原子足輕共呼寄篝等為焚、濱廻り等為致候由筋并ニ御目附方へも梶方申出候付、我等方へも文通刻付ヲ以申遣候間定而川尻方も申出も可有之と相察候処、河原子方者里数も相隔り候故後候而申来候事ニも可有之と旁相察、坂上文通方ニタ時余も相招待居候処、御左右も無之ニ付、梶方文通之趣ヲ以筋へも伺出候処、異船掛留候義ニも無之候間、先ツ今一左右相待候様ニと御達シニ付出張ハ相扣居申候処、八日朝ニ至り而ハ夜之内何方へカ走去候趣申出ニ相成候由梶方申来候事ニ而、先ツ此度ハ出張ニハ不レ及相濟候様存候、扱右申出坂上方ハ川尻沖邊ニ相当異船相見候振申出、川尻方ハ更ニ何等申出も無之候間、筋へ伺出候ニも甚不都合ニ候間、我等了簡を以申上候者、五月頃之海上ハ朝夕ハ別而靄深ク遠沖ハ誠ニ見切兼候間見損シ候事ニも可有之と申取候事ニ候、兼々沖合之義御油断ハ無之事と存候得共、七日夕刻之異船ハ更に川尻へ者

不相見事と相察申候、不相見事ハ御申出ニも不相成事当前之事ニ候得共、坂上方ハ川尻沖と相見候ハ、申出ニも川尻方ハ更ニ申出無之、何か異国番等も有之遠閑之様ニも相聞申候、此上足輕共海岸之者も別而心ヲ付相廻り候様小頭方相達候様御達可被成候、各方ニも随分此上無御由断様存候、猶亦七日暮ニ^(御)ニ至候而も沖合ニ異船相見候付、七日夜篝ヲ為焚候由ニ申来り候、左候得バ此後川尻沖ニ異船等相見、夜入候節ハ我等出張不致節たり共兼而用意之篝真木可然場所ニ而為焚候様御取扱可被成候、後日之御心得ニ此段得御意候、梶清次衛門方両度之文通写別紙御廻申候、得卜御熟覽之上小頭等へも為御見可被成候、此段得御意度、此上沖合無御由断様肝用ニ存候、已上

五月九日

佐野七郎兵衛

兩人宛来ル

別紙得御意候、先便得御意候七日夕川尻沖異船之義小宅氏方御申越之趣ニ而委細致承知候、其方ニ而茂帆船見付候付早速異国番へ御申越為見極候処、和船ニ無相違、網等遣候迄見極候故御申出も無之旨致承知候、右付委細御申出之振りニ相認、和舟之旨我等方茂書添致候而早速筋へも指出申候

一 吉衛門病身暇願之義も今便忠兵衛方取次候間、早速願之通相濟シ遣申候、右ニ付跡抱之義も兼而御嘶申候通川尻ニ而立替候振ニ今便清次衛門へ文通致候、人物撰之義も川尻庄屋方為指出候様小頭へ申越候間、各方ニも御心添御用ニも相立候人物為御撰可然候、此段得

御意候、已上

五月十一日 兩人宛ニ来ル 佐野七郎兵衛

一 小木津村郷足輕病身永之御暇願之通り相濟ニ成候故、跡抱人物撰、名前書上、庄や彦衛門方出ス書付、忠兵衛方相廻り候、左之通り

覚

一 庄五郎 次八 龍介 三人

右者此度郷足輕御立替ニ付、前書名前之者共人物并心入等茂至極宜敷もの共ニ御座候間、右三人之内ニ而御撰被仰付可被下候、已上

五月日

一 鞆栗色革面皮 八枚 一 玉胴乱 六ツ

右之御品々損シ候ニ付引替ニ指出候御品々此度引替ニ而佐野七郎兵衛方相送りニ付才料ニハ足輕七五郎付添ニ而村次人足ニ為持来り候故、前書御品々受取申候
五月廿日 水府出立、下孫ニ一宿ニ而五月廿一日着ク
(袋綴内史料挿入 後掲8)

以書付致啓達候、郷足輕小木津村吉衛門義病身ニ付役儀依願昨廿一日令免許、後職川尻村庄五郎今廿二日相達候間、此段得御意候、已上

五月廿二日

桜井五三郎
清水義兵衛

兩人宛

覚

一 鞆栗色雨革 八枚 一 玉胴乱 六ツ

但シ黒塗金輪貫紋付早合
拾ツ、付

一 胴ノ合指 壹本

右者海防御手当ニ御指出御武器之内損シ候分此度御引
替ニ而御渡之御品々慥相受取申候、己上

五月廿二日

大内勘衛門
小宅権之丞

佐野七郎兵衛様

如此相認メ請取書付佐野へ送り候、尤足輕庄五郎ニ相渡シ
五月廿四日遣ス

此度新季召抱足輕金成庄五郎儀、作之丞之組相成趣佐
野方達ニ付赤須作之丞組ニ致候様申付候ニ故忠兵衛来
り候候而届ケ候 一 折笠村郷足輕大都要七儀、是迄
作之丞組之所、前書抱ヲ作之丞江組入ニ付要七儀者除
ニ成、折笠村組役坂本市郎衛門組ニ要七ヲ組入ニ成候
趣是又忠兵衛方届有リ候

折笠村郷足輕要七病氣ニ付申出有之候間為相引申候、
此段得貴意候 兼子忠兵衛

五月廿八日

一 昨七日七ツ半頃川尻沖ニ当リ異船三艘相見候旨坂上
御郡方方申来候ニ付申上候、七日七ツ頃ニも可有之候
哉、川尻向沖ニ帆船壹艘相見候処、遠沖ニ而異船とも
難見分、沖へ乗候趣ニ相見候間早速異国番へ申遣為見
極候処、和船ニ而網遣候舟ニ無相違旨見極申候間、御

左右不申上候、其外ニも之二三艘相見候処是ハ何レ
茂和船ニ無相違様相見申候、郡方方申来候ニ付此段
申上候

五月九日

小宅権之丞

此之書付ハ小宅一名ニ而佐野へ文通へ書添遣シ候ヲ
佐野認メ直シ御筋へ申出ニ相成候趣申来リ候故留置
者ナリ

△

文政八西九月、御武器預リ受取書付坂上役所へ指出シ
置候所、文政十二丑ノ六月十一日坂上役所方小宅方
へ歸り来リ候

一 丑ノ六月廿四日ヨリ虫干始メ申候、尤足輕具足式拾
五領ほし申候 手伝(庄五郎彦之丞)

一 延紙七状 式百四拾六文ニ而調イ、壹状ニ付三拾四
文宛也

一 同廿五日ニ虫干之筈ニ候所雨天故延シ申候
一 同廿六日鉄炮式拾挺研洗為致候 手伝(介萬四郎清三郎)

尤要七手伝ニ可出筈之所何れ訳か不参ニ候

一 同廿七日虫干、鉄炮拾挺磨 手伝(藤藏治左衛門)

一 虫干之義雨天続キ而御武器干兼候間、小宅月番ニ成
り候故虫干残り御品々ハ小宅へ干候儀頼申候、己上

一 足輕弥次衛門、清三郎兩人石尊へ参詣致旨ニ而六月
廿日小頭忠兵衛御暇願被下候様申出ニ付、右忠兵衛

方六月廿三日ニ頭佐野氏へ書状仕出候所、佐野方忠兵衛方へ挨拶無、内石尊参詣之連之者出立ニ付、足輕兩人頭方達シ無之故、出立相延シ可申哉ト小頭忠兵衛へ兩人相談をよひ候所、忠兵衛挨拶ニ者御頭方未御達ハ何れ共無之候得共、心掛テ任度等、猶又連之者出立ニ相成事候得者先御達シヲ不待共出立致候様申付候、尤忠兵衛老人之了簡ニ而右兩人七月二日出立為致候

一 七月四日郷足輕具足式拾領 虫干

手伝 七五郎代

(庄五郎 栄介)

一 同五日 騎馬具足入箱志ツ、幕張角板入箱

胴乱雨革等入箱志ツ、雨火繩等入箱

箱四ツ干

手伝 (作之丞 貞藏)

一 同八日、御武器虫干 御品々之儀不分故不留候

手伝 善藏老人

御武器虫干仕舞之日、鉄炮薬干候趣ニ而大筒方之合薬目方改候処四貫四百拾匁之由、足輕方之合薬モ改候処目方七百六拾五匁之由、断リニ付書置ナリ、尤七月十三日佐野方へ合薬メリ之所届ケ之書状出シ候、後我等へ小宅方咄シ有之候

以書付致啓達候、然者百目御筒拝借試打御願別紙之通り昨九日御済口御達御坐候間此段御達申候、其旨御心得可被成候、已上

七月十日

佐野七郎兵衛

尚々本文御済口ニ相成候ニ付而者御達之面得ト御承知

之上、異船等相見へ取沙汰も無之節御試可被成候、尤当夏中も最早当月切ニ相成候間、当年之内一二度も御試被成候様ニ存候、申迄ニ者無之候得共、御済口ニ相成候上者日々御打ニ而不苦候様御心得ニ而ハ不宜候、足輕共稽古等指合無之節御試ニ致度存候、来年中ニ至候而も志ケ月ニ志度位之御心得ニ而猥ニ時々御打之義ハ御無用ニ可被成候

一 右御済口ニ相成候ニ付而ハ試打之節御筒持運ニ手伝志兩人も御入之処、足輕御拝借被成度由御申越致承知候、是ハ兩人ニ而相濟候ハ、其日海岸ニ罷出候者ヲ御遣ニ而宜様存候、尤右之振兼而足輕共相心得居候様小頭より為相達可申候間、左様ニ御心得可被成候、此段得御意候、已上

七月十日仕出シ同月十四日届ク 佐野七郎兵衛

大内勘衛門義海防詰被 仰付、大筒打方稽古之義兼而相達候振も有之、長谷川流打方伝授罷在候付、御自分へ御預之百目御筒拝借仕、自分物人を以夏中郷足輕鉄炮稽古矢場ニ而試打仕度旨願之通り相濟、尤異国船相見へ取沙汰無之節矢先をも何分心を付候様相達候条、其旨御心得可被有之候、已上 是之書付ハ御筋方佐野へ御達候写

七月廿一日ニ石尊参詣方帰宅之由ニ而廿二日ニ弥衛門并清三郎等土産ヲ以テ見舞ニ来ル

以書付致啓達候、爰元御同役様御役家風雨之節ハ前通
雨吹込御指支被成由ニ而、玄関方新たニ枇さし出来候
様被成度旨御願之趣ニも御座候処、其御役家之儀者如
何可有之哉、若右同様御願被成候儀も御座候ハ、追々
ニ相成候様ニ而ハ調にも指支候間、御程合致承知度、
此段得御意候、已上

七月廿四日

櫻村富藏
清水茂兵衛

兩名ニ来ル

尚々本文御願被成候儀ニ候ハ、書付ヲ以テ御さし出可
被成候、且佐野殿方之御用到来イ御廻し申候、已上
一 海岸夜廻之儀も佐野より七月晦日迄ニ為廻、夜廻り
相止候様小頭忠兵衛方へ達ニ付、右振りヲ忠兵衛方足
輕組役共へ相違シ申候、八月朔日方ハ朝夕廻りニ相成
候

覚

一 荏油三合

代百三拾六文

右者此度油御用ニ付指上申候所、前書之代鏝慥ニ受取
申候、以上

丑七月

折笠村
油屋 長介
小宅権之丞様
大内勘衛門様

覚

一 延紙反古五百枚

但シ目方三百七拾目
直段百目ニ付代百廿文

代々四百四拾八文

右者此度反古御用ニ付指上申候処、代鏝前書之通り
通り御渡シ被下候間、慥ニ受取申候、以上

丑七月

川尻村
南部屋 伊兵衛
小宅権之丞様
大内勘衛門様

佐野方書面、前文略シ、枇さし所計写ス

一 役家玄関前ひさし願御指出被成度由折節梶出府ニ御
坐候間内談致候処、梶付属も願出候由ニ候間、御同勤
ト申合御兩名ニ而御指出被成候、如斯佐野方申来り候
ニ付則願書認メ佐野方へ掃出し申候
権之丞安文之願書左之通り

私々居住候御役家之儀ハ元来東南ニ向、土地方も高御
座候故ニ巽嵐之節ハ真向方吹付表通戸障子ハ勿論晝迄
壁雨吹込、何レニも難凌奉存候、尤巽嵐計ニも不限都
而東南之節ハ両方之山間方真向ニ吹付其時々難凌仕
候、右ニ付御時節柄ヲも不奉願奉願儀恐入候得共、
玄関方前通枇□ニ而も仕候ハ、格別凌宜様奉存候間、
何卒御普請被下候様奉願上候、早速願之通り御普請被
下候ハ、難有仕合奉存候、已上

丑八月

小宅我等兩名ニ而出ス

△ 一 八月廿一日東風強、大雨ニ而御土蔵風窓戸方雨沢山
ニ吹込御武器之内ヌレ候御品有之ニ付、廿二日海岸之
者兩人召遣、騎馬鎧式領、洪紙十枚、御幕壹封、小頭
鎧、獵師へ御貸出ニ相成候雨革式拾五枚、御笠式拾
三、高張等追手入致候、尤要藏、庄介遣イ候

△ 八月廿三日御鉄炮拾六挺手入研候 吉郎衛門、清三郎

*枇さし…ひさし。庇

同月廿四日御鉄炮拾六挺手入研候 兵藏、栄次郎

同月廿五日御鉄炮拾六挺手入研候 市郎衛門、要次郎

同月廿六日御鉄炮四挺并足輕入候箱三箱干申候、其余

之箱者ヌレ不申様ニ候間不干 尤要七、新八

御武器手入之儀八月廿六日切ニ仕舞申候

○ 八月廿八日八ツ頃佐野七郎兵衛先触届キ候

同廿九日佐野七郎兵衛川尻着ニ成ル、宿陣者酢屋半兵

衛宅、晦日休足ニ而、九月朔日石濱汀ニ而ナラシ致

候、尤我等儀者指合ニ而不参候、且ツ此日出張致候得

者市郎衛門、彦八郎之組等ヲ召連レ可申順合ニ候

△ 小木村郷足輕平兵衛儀痲病ニ而煩イ候ニ付、以組役小

頭忠兵衛へ申出ニ付、明三日方勤メ為引候趣月番小宅

申越候ニ付、我等へ小宅方申聞ケ有之候

一 九月二日 佐野七郎兵衛九月三日川尻より帰陣致候

覚

一 日数九十三日

一 右者当四月廿六日夕方七月廿九日夕迄夜廻り被 仰付

候日数前書之通りニ御座候、以上 両名ニ而出ス

九月二日

右之通り認メ指出シ候所、四月廿一日方夜廻り之賑ニ

無之候而ハ宜敷無由ニ而右廿一日夕方夜廻り致候趣之

御心得被成候下被申候、已上

覚

一 百三十六文

荏油三合代

一 四百四拾八文 反古五百枚代

一 壹貫貳百三拾八文 蠟燭代

三口ノ壹貫八百貳拾六文

此金壹分百六拾貳文

右之通り指越候間蠟燭代ハ忠兵衛へ御渡シ、油反古代

ハ御入箱可被成候、已上

九月廿一日出 廿三日夕届ク 佐野七郎兵衛

両名ニ而来ル

夏中足輕共夜廻り蠟燭代御渡シニ付佐野氏受取相廻ニ

候間、鏝壹貫貳百三拾八文足輕庄三郎ニ相渡シ忠兵衛

方へ相届ケ申候、尤蠟燭代之儀者九月廿四日小頭方へ

届ケ申候 一 樟腦五拾目受取候趣ニ而是モ九月廿三日夕佐野方方

届キ候

我等儀在所ニ用向有之ニ付、在所逗留日数三十日之

御暇願相濟候ニ付、十月十二日川尻出立ニ而在所罷

越居候内 中納言^{*}様御逝去ニ付佐野七郎兵衛方左之

通り申来り候

以書付致啓達候、此度 御新葬ニ付、額田村 御旅

棺場并ニ御法事之節、他所使者等へ御賄仕出、坂上

郡方取扱ニ付持場数ヶ処ニ而手代共廻合兼候ニ、濱

詰之外郷土とも相雇候得共不行届ニ付、岡部新次衛

門、小宅権之丞をも相雇申度筋へ伺出候由、今日梶

清次衛門方文通ニ而申遣候、此節之義ニ候間定而伺

も相濟、権之丞義御雇ニ罷出候義と存候、依而ハ来

* 中納言様…徳川齊脩。文政十二年十月四日 没。

月初二ハ 御通棺ニ相成候御沙汰ニ有之候間、御暇日数之内ニ御坐候得共 上之御指支ニ相成候而不宜候間早速川尻へ御帰宅可被成候、尤御帰宅之節者御目付方へ御届無之而者不相成候間旁御心得可被成候、此段御意候、已上

十月廿一日

佐野七郎兵衛

尚々梶清次衛門方文通之趣御心得ニ相認遣し候間、右之振ニ御承知可被成候、御通棺之節御領中郷士共□長新町一丁目伺之上為奉拜之処、小宅権之丞、岡部新次衛門義者額田村へ為相詰候ニ付而ハ、大内勘衛門、武藤長之介兩人共 御棺拜ニ者其許様へも御申合之上可相達旨是亦筋へも申出候間、旁右様御承知、御附属兩人へも猶更御達可被成候

右之振ニ申遣候、此度之御儀ニ而者心配も不相成候間、旁御心得御帰宅可被成候、已上

尚々御帰宅之節ハ早速我等方へも御届可被成候、已上

御通棺之節者自分方長新町江罷出奉拜候前例ニ候所、相役小宅権之丞来ル廿九日方額田村へ出役相成ニ付、御自分儀者御棺拜不罷出、此節猶更防禦罷在候様御達有之条其旨御心得早速川尻村へ相詰メ、跡御用面御申合可被有之候、已上

十月廿六日

梶清次衛門

大内勘衛門様

前書之通り佐野氏、梶氏兩人方申来り候ニ付、御暇日数之内ニハ候得共川尻へ帰宅之趣御目附方へ山下氏ヲ相頼届ケ、十月廿八日川尻へ帰宅致、廿九日方月番ヲ

持相勤メ申候

(貼紙)

「文政十三庚寅二月御達之由ニ而諸士不残羽見致候由ニ候

中将様御直書之写

一文武者武士之大道ニ而人々出精可致事、依之時々不相達候、只情不精ハ追而可及沙汰に候条、已来左様可存事

一 存寄有之族者何役ニ而も無遠慮何レ方成共封書指出可申事

袋綴内挿入史料

(1) 海防手当武器受取覚

覚

一 百目玉唐銅筒式挺

但木軽篋式本

一 同鉛玉 八拾 但箱老ツニ入

一 合薬 五貫目

一 口薬 三百目

一 筒薬入張さる 式ツ

一 口薬入竹筒 式ツ

一 竹火縄 五輪

一 同雨火縄 五輪

一 鋌貫 式挺

一 木槌 式挺

一 棒 式本 但杉

一 青細引 式本

一 洪紙 四枚一 三布白御幕 壹封

但紐共一 同串 八本

一 丸水御高張 壹ツ

但掛棹雨覆共二

子八月廿七日ニ大筒之方請取

酉ノ十月五日御幕之方請取

戌四月十二日請取

一 金紋同心具足壹領 但洪紙ニ包

小手 胴繰ベ布付

上帯紺木綿

一 金輪貫革笠 壹ツ

一 袖印 壹ツ 但紺地白輪貫付
下二こくもち付

一 早合胴乱壹ツ

但黒塗金輪貫紋付早合入拾付

竹早合付木綿緒付

一 雨革壹枚 但栗色無地

此之御品者小頭分ナリ

(2) 郷足輕処分状

郷足輕 吉衛門

其方義先達而湯治御暇願指出シ罷越候処、途中方病氣ニ而立返候趣ニハ有之候へ共不心得之趣相聞候、畢竟常々心得不宜候故之儀ニ呵押込申付候間、屹ト相慎可罷在もの也

八月

(3) 大内勘衛門父法事に付暇願状

「私亡父十七年回ニ相当候ニ付法事修行仕度奉存候間、十一月朔日方道中之外日数十五日在所御暇相濟候様奉願候、以上

亥十月 大内勘衛門

(4) 大内勘衛門ら宛異船に付書状

尚々本文之儀佐野殿へも頭方運ニ相成候事ニ御坐候、□□□御心得ニ得御意候、已上

以書付致啓上候、今七ツ頃当所陸方式里余東沖ニ異舟壹艘相見候間、足輕等相図を以爲相詰、御道具等用意致置候処、当時者漂居候様子而已ニ相見候間、夜中ハ篝為焚、濱廻り等夫々手当申付被置候事ニ御坐候、定而御地方も為見御承知之事とハ存候ても、此段御心得ニ得御意候、已上

四月廿一日 佐川与一郎
清水茂兵衛

小宅権之丞様
大内勘衛門様

(5) 鉄砲入箱等へ付け細引数書上

覚

一 旅箱拾壹 此分

青細引拾壹本

一 御鉄砲入箱五棹 此分

青細引五本

一 雨革胴乱入箱 此分

青細引壹本

*こくもち付…黒餅付。着物に黒餅の紋をつけること

- 一 竹雨火繩口葉壺大箱 此分
- 一 百目玉唐銅御筒式挺 此分

青細引式本

御品々へ付候分細引式拾本

如此認メ別紙ニ致役所へ相送申候

- 一 黒塗金輪貫付胴乱六ツ

右式行破レニ付引替御差出受取申候、已上

佐野七郎兵衛

四月廿四日

大内勘衛門様

*佐野七郎兵衛による鉄砲稽古見分は、
文政十一年四月二十五日に川尻において
行われており、これに関連するか。

(6) 郷足輕鉄砲稽古状

四月廿二日佐野見分ニ付五ツ放宛打申候付如

レ左之

- 一 丁組 。沼田要藏 一 中り四ツ。小林彦介
- 一 中り三ツ 関 栄 介 一 同三ツ 鈴木清三郎
- 一 同三ツ。小林兵藏 一 同三ツ。大津要次郎
- 一 同三ツ。佐藤藤藏 一 同三ツ。馬上藤左衛門
- 一 同三ツ 鈴木介八 一 同三ツ 小林孫次衛門
- 一 同三ツ 大津吉郎衛門 一 同三ツ。国井栄次郎
- 一 同三ツ。大森彦八郎 一 一ツ 山形貞藏
- 一 同三ツ 大津要七 一 同三ツ 保科次左衛門
- 一 同三ツ 鈴木善藏 一 同三ツ 鈴木万四郎
- 一 同三ツ 海野彦之丞 一 同三ツ。坂本市郎衛門
- 一 同三ツ。黒沢平兵衛 一 同三ツ。小野新八

(7) 海防手当具引替覚

覚

- 一 角板打木 式挺
- 但シ大之分

右者此度引替返納分受取小之分式挺御渡申候、已上

- 一 靱栗色雨革 八枚

〔封書ウツ書〕
「小宅権之丞様

大内勘衛門様

佐野七郎兵衛

覚

- 一 靱栗色雨革 八枚

- 一 玉胴乱 六ツ

但黒塗金輪貫紋付早合入 拾ツ、付

- 一 胴合指 一ツ

右之通指遣候間、御受取可被成候、受取書付ハ後便ニ御認
御用便之節御届可被成候、以上

佐野七郎兵衛

五月廿日

小宅権之允様

大内勘衛門様

外ニ簀巻ツ小宅氏之分御武器上包ニ致候間遣申候、以上

制作 日立市の歴史点描

二〇二四年九月三〇日